

対面接触場面における調整行動

—台湾人日本語学習者と
日本語母語話者の会話より

施 信余

◆要旨

本 研究では、日本語母語話者と台湾人日本語学習者による接触場面での自然会話を取り上げる。分析に用いた対面接触場面での会話は、人間の相互作用としての「言語運用」の分析に適した形で文字化され、公開されている宇佐美まゆみ監修（2011）『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』の中の12会話（初対面二者間・雑談）である。それらの会話データを、コミュニケーション問題を解決するために行われる調整戦略にはどのようなものがあり、それぞれの調整戦略がインターアクションの中でどのように機能しているかについて考察した。その結果、会話参加者の考えている内容を重視する場面では、母語話者と学習者の間の言語ホスト対言語ゲストという固定化した関係が崩れる可能性が示唆されている。

◆キーワード

対面接触場面、意味交渉、上級日本語学習者、形式調整行動、内容調整行動

◆ABSTRACT

This study is aimed to analysis the real conversation between those Japanese native speaker and Taiwanese Japanese learners, and clarifies in the scenery of a face-to-face conversation, in order to solve communication barriers, what "adjustment actions" Japanese native speakers or Japanese learners will take.

The conclusion reveals that, for those Japanese learners, even though their Japanese is not as good as Japanese Native speakers, however when the conversation topic draws their attention, they will not stay inactive as they used to be and even raise questions actively. If there is any insufficient in expression, other participants will jump in and help. In short, the role of Japanese native speakers and Japanese learners are not always constant. In other words, in the past we label them as "active" or "inactive" will be revised, especially when the conversation topics puts more emphasize on speaker's own mind set and content being expressed, this situation creates a more equal and meaningful conversation.

◆KEY WORDS

face-to-face conversation between native speaker and non-native speaker, negotiation of meaning, advanced Japanese learner, adjustment in form, adjustment in content

The Behavior Adjustment Occurred in Face-to-face Conversation

Based on observation between Taiwanese Japanese learner and Japanese Native speaker

SHIH HSIN-YU

1 はじめに

接触場面とは、目標言語による母語話者と非母語話者間のインターアクション場面のことである。接触場面において円滑なコミュニケーションの実現を目指して母語話者がとる言語行動を対象として、これまで社会言語学や言語習得研究の領域において多くの研究が進められてきた（鄭1997, ファン1999など）。母語話者と非母語話者の接触場面において、母語話者は非母語話者とのコミュニケーションを維持するために言語ホストとして会話に参加し、非母語話者は言語ゲストとして参加するという役割関係をなしているとされてきた（ファン1999）。また、非母語話者側のコミュニケーション・ストラテジーと母語話者側のフォリナー・トークについての研究のほとんどが、接触場面でのコミュニケーションの問題は非母語話者の伝達能力の不足にあると考えられていた（西口1999）。しかし、日本語レベルの低い者が日本語レベルの高い者に学ぶという従来の学習観の下では、母語話者と非母語話者、または日本語レベルが異なる学習者間に上下関係が生まれ、学習者一人一人の持つ無限の可能性が抑圧され、多様な学びの機会を奪ってしまう恐れがある。接触場面研究においても、母語話者対非母語話者の関係を、「言語ホスト対言語ゲスト」^[註1]という固定関係で捉える傾向を批判的にみる必要があると思われる。

母語話者と学習者の接触場面では、互いの理解を深めるために様々なやりとりが行われている。しかし、両者のやりとりに言語形式上の問題だけではなく、コミュニケーション全般に関わる問題を処理するために、「意味交渉 (negotiation of meaning)」が必要となってくる。つまり、両者のインターアクションの中で行われる意味交渉こそ、接触場面のコミュニケーション問題を解決する鍵になると考えられる。宮崎（1998）は意味交渉の研究について、「インプットに関する実証研究が進められてきたが、こうした研究では、接触場面でのコミュニケーション問題（不適切さ）が起きた場合、どのように処理するかについての考察が不十分である」としている。そこで宮崎はコミュニケーション問題を処理するための調整モデルを提示している。さらに宮崎（2002）では、「いままでなされてきた意味交渉研究でデザインされているタスクは、自然な場面で

起きる交渉を反映していない」と指摘している。

今まで、日本語の意味交渉研究ではタスク中心の研究が主であり、自然場面の会話からの試みはほとんどなされていない。日本語教育の最終目標は少なくとも、教室の中で作られているタスク活動から教室以外の会話場面でのコミュニケーションに学習者のレベルを持っていくことであろう。むしろ、自然場面での会話を通して日本語学習者と日本語母語話者の意味交渉の実態を見極めてから、日本語教育に有効な調整行動を見直すことが有効であると考えられる。

そこで、本研究では、日本語母語話者（以下NSと称する）と台湾人日本語学習者（以下NNSと称する）による話し合い^[註2]の自然会話を取り上げ、初対面両者間のコミュニケーションにおいて、会話参加者は、コミュニケーション問題を解決し、会話を維持するために行われる調整行動にはどのようなものがあるかを考察することを目的とする。

2 本研究における用語の定義

宮崎（1998）は、これまでの意味交渉研究は、意味交渉の意味を、狭義の意味（文法項目）として捉えがちで、より広範囲の問題として考える必要があると指摘している。また、意味交渉の研究対象は意味の交渉だけに留まるのではなく、インターアクション全般の交渉へと拡大しなければならないと主張している（宮崎2002）。宮崎の指摘を踏まえ、本研究では意味交渉を、単なる語彙などの言語形式上の交渉だけではなく、内容を伝達するための交渉も含めたものとして、より広く捉え直すこととする。また、言語形式上の問題に重点を置いた従来の意味交渉を「形式面の意味交渉」、話す内容全般のための意味交渉を「内容面の意味交渉」と呼ぶこととする。

ネウストプニー（1997）は、調整行動を、インターアクションの中で起きた問題を解決するために行われるもので、その問題はインターアクションを支配する規範から逸脱したときに起こるものであるとしている。それに対して、本研究では調整行動を、規範に逸脱したときの問題解決の手段と見なすより、自分の考えがうまく伝わるように、他者と協働作業をしながら達成させる手段であると考えている。したがって、本研究では調整行動を、意味の伝達がうまくい

かないおそれのあるとき、会話参加者が協力して意味の伝達を補償する行動であると定義する。

3 研究方法：対象とする会話データ

本研究では、日本語母語話者と台湾人日本語上級学習者による接触場面での自然会話を取り上げる。分析に用いた対面接触場面での会話は、人間の相互作用としての「言語運用」の分析に適した形で文字化され、公開されている宇佐美まゆみ監修 (2011) 『BTSJ』による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011年版』の中の12会話 (初対面二者間による雑談、計234分20秒) である (詳細は表1を参照)。それらの会話データを、コミュニケーション問題を解決するために行われる調整ストラテジーにはどのようなものがあり、それぞれの調整ストラテジーがインターアクションの中でどのように機能しているかについて分析・考察する。

表1 会話の基礎データ

会話グループ名	台湾人学習者 (上級) と日本人の初対面雑談
分析言語	日本語
研究目的 ^[注3]	留学経験がない台湾人学習者のスピーチレベルの使用実態を明らかにし、それを母語話者のものとの比較を通して、学習者と母語話者のスピーチレベル選択における類似点・相違点を探り出すことを目的とする。
被験者 (属性・年齢・性別・人数を会話の組み合わせごとに)	20代前半大学生・大学院生男女 学習者：能力試験1級を持ち、留学経験がない学習者に統制した。
話者の関係	初対面同性同士
収集方法	ベースを設定して、それぞれに初対面の20代前半 (同等)・30代前半 (年上) の対話者に会話してもらう。
会話のジャンル	接触場面 (日本語母語話者と台湾人日本語学習者) の雑談
1会話における話者の数	2人
総会話数	12会話
1会話の平均時間 (分)	約19分32秒
総会話時間 (分)	234分20秒

4 分析方法

本研究では、「会話参加者が各自の考えていることを表現すること」を遂行するために、会話参加者の間で行うインターアクションに注目し、それを「意味交渉」として捉え、「調整行動」という観点から分析する。

調整行動の分析にあたり、「形式調整行動」と「内容調整行動」という枠組みを用いる。前者は「形式面の意味交渉」のために行われ、語彙、表現、文法、発音といった言語形式に関わる問題を解決するものであり、後者は「内容面の意味交渉」のために行われ、会話参加者がテーマについて考えている内容を表現したり、引き出ししたりすることに働きかけるものを指している。

また、ファン (1999)、池田 (1999) を参考に、さらに調整行動の分類を、調整の引き金となるマークがどのような形式であったかという「調整要請型」と、どのような調整が遂行されたかという「調整実行型」の二つに分ける。要するに、調整行動を大きく、「調整要請型」形式調整行動、「調整実行型」形式調整行動、「調整要請型」内容調整行動、「調整実行型」内容調整行動の四つに分けることにして、それぞれさらに下位分類をした。

表2 「形式調整行動」：「形式面の意味交渉」のために行われ、言語形式の問題を解決するもの。以下は各分析項目の定義と具体例である。

性質	調整行動	定義
調整要請型	1. 聞き返し	相手の発話中、語彙や意味が理解できなかったり、聞き取れなかったりした際に、自分の不理解を表明するもの。
	2. 支援要請	自分が発話する際に、語彙や表現などの言語形式の問題で伝達に困難が生じた場合、相手に支援を求めるもの。
	3. 確認要求	相手の発話に対して、理解したとおりに表現することによって、自分が正しく理解しているかを確認させるもの。
	4. 理解チェック	自分の発話が相手に正しく理解されているかどうか確認するもの。
調整実行型	1. 理解促進	自分の発話を調整することで、相手の理解を図るもの (相手の不理解を表明する「聞き返し」が先行する場合とそうでない場合がある)。
	2. 支援実行	相手の支援要請から、相手の伝達上の困難を察知し、相手が伝えたいことを表出できるように援助を行うもの。
	3. 他者修正	相手の発話の不適切さに気づき、修正を行うもの。その相手は修正があってはじめて自分の不適切さに気づくものが多い。

例1 「聞き返し」の例（該当発話：発話文番号101）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者 ^[注4]	発話内容
111	98	*	NNSBM03	え?、なぜ?。
112	99	*	NSSM03	何だろうなあ、僕は、もちろん中国にも行ってみたいっていうのもあるし、(はい) それと、まあ、中国語を勉強しているというのものもあるから。
113	100	*	NSSM03	“あもい”のほうに。
114	101	*	NNSBM03	あもい? 。
115	102	*	NSSM03	“あもい”っていうのは、えと、福建省のほうで、廈門、(あああああ) ああ、あの辺に行って、台湾を見てみたいっていうのも1つ、それが1つの夢で、もう1つの夢は、あの、台湾から、(はい) そういう中国大陸を眺めてみたいっていう (ああ) 変な夢があって、(<笑い>) うん、で、それをやるには、金門島に行くしかないんだよね、(はい) もし中国を見たいのであれば。
116	103	*	NSSM03	それで、あの、後輩が今この大学で「大学名3」で勉強してるん (あー) ですが、あの、日本の大学の時の後輩ですね。
117	104	*	NSSM03	で、彼と一緒に2人で、金門島に行ってきました。
118	105	*	NNSBM03	そうですか[↓]。

例2 「支援要請」の例（該当発話：発話文番号279）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
298	278	*	NSOF01	そっかじゃあ日本の印象はどうですか?。
299	279	*	NNSBF04	日本の印象は (うん)、えー、きれいだし (うんーうんうん)、うーん、人々が、えー、熱中??、熱中じゃなくって…>{<}。
300	280	*	NSOF01	<あー>{>}、親切?。
301	281	*	NNSBF04	親切[手をたたく]、<そうそうそう>{<}。

例3 「確認要求」の例（該当発話：発話文番号172）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
184	170	*	NNSBM03	下町?[↑]。
185	171	*	NSSM03	うん、だから、浅草とかさ、<ああいうところ>{<}。
186	172	*	NNSBM03	<ああ、伝統市場?>{>}。
187	173	*	NSSM03	伝統 (ああ) 市場とか。
188	174-1	/	NSSM03	あの辺も、けっこう、お店、こう、経営している人たちは、何代も、3代とか、5代とか、
189	175	*	NNSBM03	あー、すごいですよ。
190	174-2	*	NSSM03	ずーと長い、そういう歴史があるんだよね。

例4 「理解チェック」の例（該当発話：発話文番号171、175）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
180	168	*	NNSBF01	で、(<2人笑い3秒>)、えと、「NSSF01の姓」さんは1人暮らししたことが<ありますか?>{<}。
181	169	*	NSSF01	<えと、えとね、>{>}1ヶ月だけある。
182	170	*	NNSBF01	1ヶ月、(<笑い>) 1ヶ月だけ?<2人笑い>。
183	171	*	NSSF01	大学で、大学祭って分かる?[↑]。
184	172	*	NNSBF01	大学… 【】。
185	173	*	NSSF01	【】 学園祭。
186	174	*	NNSBF01	あ、知ってます。
187	175	*	NSSF01	学園祭の時に、「大学名1」は1ヶ月半ぐらい、皆で、おみこして分かる?[↑]。
188	176	*	NNSBF01	あ、分かります。
189	177	*	NSSF01	おみこしと、中国語の劇、(はい) をするために、おみこしは夜の、いつも2時とか3時までずーと作っているの、授業終わってから、5時ぐらいから。

例5 「理解促進」の例（該当発話：発話文番号112）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
114	108	*	NSSM01	まあ、この、陽明山の、(はい) 気候にまだ慣れてないです<笑い>。
115	109	*	NNSBM02	あー。
116	110-1	/	NSSM01	気候,,
117	111	*	NNSBM02	気<候>><{>。
118	110-2	*	NSSM01	<分>><{>かります?〔↑〕。
119	112	*	NSSM01	暑くなったり、寒くなったり、(<笑い>) 風が吹いたり、(はい) 霧が出たりするでしょう?<笑い>。

例6 「支援実行」の例（該当発話：発話文番号303）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
310	301-1	/	NSOF01	そう、あとはなんかあの、台湾の卵焼き (はい)、あの、なんだっけ、うーんと、ツァイとかいう,,
311	302	*	NNSBF01	ツァイ。
312	301-2	/	NSOF01	うん、中に (うん) なんか漬物みたいの<入ってる><{>,,
313	303	*	NNSBF01	<大根の>><{>。
314	301-3	*	NSOF01	そうそうそう大根の、が好き。
315	304	*	NNSBF01	私も好き<笑い>。

例7 「他者修正」の例（該当発話：発話文番号391）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
408	384	*	NSOF01	あ、でもね、そう、なんか、春に、あの、『Good Luck』って…<知ってる?><{>。
409	385	*	NNSBF03	<『Good Luck』>><{>?。
410	386	*	NSOF01	うん。
411	387-1	/	NSOF01	ドラマで (あー)、木村拓哉が (ふん、ふん) 出てる (あー)、飛行機の,,
412	388	*	NNSBF03	あっ。
413	387-2	*	NSOF01	パイロットを…。

414	389	*	NNSBF03	あ、き、聞いた (うん)。
415	390	*	NNSBF03	見て無いけど、<聞いた>><{> 【。
416	391	*	NSOF01	】<聞いた>><{>ことあるんだ。
417	392	*	NNSBF03	うんうんうん。
418	393	*	NSOF01	うん、あれがね、面白かったですよ<笑い>。

表3 「内容調整行動」: 「内容面の意味交渉」のために行われ、内容を引き出せるように働きかけるもの。以下は各分析項目の定義と具体例である。

性質	調整行動	定義
調整要請型	1.内容確認要求	相手の発話内容に対して、語彙レベルの意味を確認するのではなく、相手が伝えたいことについて自分の理解が正しいかどうか、相手に確認を求めるもの。
	2.明確化要求	相手の発話から発生した質問や疑問である。相手の発話に関して、①意図がわからない、②興味を感じ、もっと知りたい、③自分の理解、予想したことと異なった場合、相手にその説明を要求するもの。
調整実行型	1.内容確認応答	相手の「内容確認要求」に応じて、応答するもの。「うん」と答える場合もあれば、説明したり補足したりする場合もある。
	2.明確化	具体的な例や言い換えなどにより自分の発話の意図を更に説明したりして、自分の伝えたいことが明確に相手に伝わるように試みるもの（相手の「明確化要求」が先行する場合とそうでない場合がある）。

例8 「内容確認要求」の例（該当発話：発話文番号354、356）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
373	348	*	NSSF01	え、そのおじさんも、こう、お皿を作ってるの?。
374	349	*	NNSBF03	お、おじ、おじ、は、窯、窯を作ってる。
375	350	*	NSSF01	窯を作ってる?[驚いたように]=。
376	351	*	NNSBF03	=うん、うん。
377	352	*	NSSF01	え、窯を作るの?。
378	353	*	NNSBF03	=うんうんうんうん、そうよ。
379	354	*	NSSF01	え、誰かの家に行って、窯を作るの?。
380	355	*	NNSBF03	あ、もし、工場が必要になつたら<{> 【。
381	356	*	NSSF01	】<新しい工場>><{>を作る時に (うん、うん)、窯を作るの?。
382	357	*	NNSBF03	はい、はい。
383	358	*	NSSF01	<笑い>凄いね。

例9 「明確化要求」の例（該当発話：発話文番号43）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
42	41	*	NSOF01	=じゃあ、日本語を勉強して、(うん) 英語の勉強と違うなあって思うことはありますか？。
43	42	*	NNSBF03	はい、(うん) だから日本語は下手になりました<2人笑い>。
44	43	*	NSOF01	<笑いながら> どうして？。
45	44	*	NNSBF03	あの、いやあの英語、あの、日本語を勉強する時、(うん) 英語は、だんだん、あの、勉強する時間もなくなり<ましたから>{<}。
46	45	*	NSOF01	<うんうんうん、>{>}そうですね、分かります。
47	46-1	/	NSOF01	あと、日本語の中には、(うん) カタカナがたくさんあって、
48	47	*	NNSBF03	はいはいはい。
49	46-2	*	NSOF01	なんか英語と違う発音だから、<笑いながら> (うんうんうん) 日本人も英語があまり上手じゃないですよ<笑いながら>。

例10 「内容確認応答」の例（該当発話：発話文番号119）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
125	117	*	NNSBM02	あ、「大学名2」はどうですか？。
126	118	*	NSSM01	あ、イメージですか？。
127	119	*	NNSBM02	イメージ、風景とか、…なんでも。
128	120	*	NSSM01	とりあえず、大きいですね。

例11 「明確化」の例（該当発話：発話文番号411）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
431	408	*	NSSM01	補講はやるときも、やる先生もいますけどー、やらない先生もいます。
432	409	*	NNSBM02	あ、そう。
433	410	*	NNSBM02	やらない先生は、補講しない、でも学校の方は平気ですか？。
434	411	*	NSSM01	それも先生次第ですねー、はい。
435	412	*	NSSM01	だから、ちゃんとまじめに授業する先生もいますけどー(はい)、手を抜く先生もー、もちろん。

5 結果と考察

ここでは、第4節で述べた「形式調整行動」と「内容調整行動」はそれぞれ会話の中でどのように行われているか、また、インタラクションの観点から、「形式調整行動」と「内容調整行動」は互いにどのように関わっているかについて考察する。

5.1 調整行動の使用

まず、形式面の調整行動と内容面の調整行動それぞれの使用頻度およびその割合を表に示す。

表4 「形式調整行動」の使用頻度と割合

性質	調整行動	NSによるもの	NNSによるもの
調整要請型	1.聞き返し	1 (1.1%)	7 (10.3%)
	2.支援要請	1 (1.1%)	8 (11.8%)
	3.確認要求	4 (4.6%)	1 (1.5%)
	4.理解チェック	13 (14.8%)	2 (2.9%)
調整実行型	1.理解促進	9 (10.2%)	2 (2.9%)
	2.支援実行	9 (10.2%)	1 (1.5%)
	3.他者修正	2 (2.2%)	0 (0.0%)
合計		39 (44.2%)	21 (30.9%)

*括弧内に示されている割合は、「形式調整行動」と「内容調整行動」を合わせた全体の使用頻度に占める割合である（以下同様）。

表5 「内容調整行動」の使用頻度と割合

性質	調整行動	NSによるもの	NNSによるもの
調整要請型	1.内容確認要求	5 (5.8%)	2 (2.9%)
	2.明確化要求	26 (29.6%)	14 (20.6%)
調整実行型	1.内容確認応答	2 (2.2%)	5 (7.4%)
	2.明確化	16 (18.2%)	26 (38.2%)
合計		49 (55.8%)	47 (69.1%)

5.1.1 「形式調整行動」

「調整要請型」形式調整行動：

- 1) 「聞き返し」と「支援要請」について、NNSによる使用がほとんどだった。
- 2) 「確認要求」について、NSはNNSより頻繁に行っていた。
- 3) NSが細かく「理解チェック」をしながら発話することはあまりなかった。それは会話協力者になってくれた日本語学習者の日本語能力が比較的高いからだと考えられる。
- 4) NNSが使用する「理解チェック」と、NSが使用する「確認要求」は、単なる日本語における文法や語彙だけの問題ではない。NNSがより多くの情報や知識を持っている場合、相手であるNSが間接的にまたは直接NNSに修正や確認を求める原因は、NNSにより多くの情報や知識があるからだとして想定できる。つまり、NSとNNSのコミュニケーションで生じる問題はNNSだけにあるのではない。したがって、接触場面においてより円滑なコミュニケーションを行うためには、NSとNNSがどれくらい共通の理解を求め、互いに協調するか否かに焦点を当てなければならない。

「調整実行型」形式調整行動：

- 1) 「理解促進」と「支援実行」は、NSによる使用が多かった。
- 2) 「他者修正」は、わずかながらNSの発話にのみ現れた。

以上のことから、「形式調整行動」の観点からは、日本語能力の異なる会話参加者の間には、言語ホスト対言語ゲストという関係が成立しており、日本語学習者は言語ゲストとして位置づけられる傾向があると言える。

5.1.2 「内容調整行動」

- 1) Pica et al. (1989) では、学習者の発話が理解困難な際、母語話者が学習者の発話の明確化を求める「明確化要求」が学習者の発話の修正を引き起こしたとしている。本会話データにおいても、母語話者が学習者の発話を正しく理解しているか確認する「内容確認要求」は数多く観察された

が、それに対する「内容確認応答」は“はい”、“いいえ”などで簡単に答えるだけで済むものがその大半であるため、学習者のアウトプットの修正を引き起こさなかったという結果が出た。ところが、母語話者による「内容確認要求」は学習者が表現しなかった適切にできなかった表現、いわば「モデル発話」を含んでいるため、学習者にとって重要なインプットとなると思われる。

- 2) 調整要請型「内容調整行動」について、NSのほうがより多く用いるが、NNSでもテーマに関心が強い場合には、より多く行うようになる。

以上のことから、母語話者より日本語レベルが低い学習者でも、身近な話題や自分の興味関心のある内容について語る際に、言語ホストになる可能性があり、言語形式上の不足部分が他者の提示によって補われる際に、言語ゲストになることがわかった。

5.2 「形式調整行動」と「内容調整行動」の相互依存連鎖

以下では、使用された調整行動の中で、「形式調整行動」と「内容調整行動」は互いにどのように関わっているかについて述べる。

考察の結果、両者は切り離されて起こるものではなく、密接に関連し、相互に依存している連鎖であることがわかった。以下では「形式調整行動」と「内容調整行動」が依存し合う実例を示す(例12)。

例12 「形式調整行動」と「内容調整行動」が依存し合う会話例

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
103	91	*	NSSM03	それで、今日、あの一、一昨日から、金門島のほうに行って、(あぁー) 金門<島面白かった>{<}。
104	92	*	NNSBM03	<どう思いますか?>{>}。
105	93	*	NSSM03	面白かったですよ (うんうん)。
106	94	*	NSSM03	めっちゃくちゃ面白 (<笑い>) かった<2人笑い>。
107	95-1	/	NSSM03	僕ら、まあね、台湾人にとっては、あーまあ、兵役で行く一番嫌なところ (うん) だと思っただけ。

108	96	*	NNSBM03	ああ、そうですよ。
109	95-2	*	NSSM03	帰ってこれないし。
110	97	*	NSSM03	僕らは、すごいよかったですよ。
111	98	*	NNSBM03	え?、なぜ?。 『明確化要求』
112	99	*	NSSM03	何だろうなあ、僕は、もちろん中国にも行ってみたいっていうのもあるし、(はい) それと、まあ、中国語を勉強しているというのもあるから。 『明確化』
113	100	*	NSSM03	“あもい”のほうに。
114	101	*	NNSBM03	あもい?。 「聞き返し」
115	102	*	NSSM03	“あもい”っていうのは、えと、福建省のほうで、廈門、(あああああ)あの辺に行って、台湾を見てみたいっていうのも1つ、それが1つの夢で、もう1つの夢は、あの、台湾から、(はい)そういう中国大陆を眺めてみたいっていう(ああ)変な夢があって、(く笑い)うん、で、それをやるには、金門島に行くしかないんだよね、(はい)もし中国を見たいのであれば。 「理解促進」と『明確化』
116	103	*	NSSM03	それで、あの、後輩が今この大学で「大学名3」で勉強してるん(あー)ですけど、あの、日本の大学の時の後輩ですね。
117	104	*	NSSM03	で、彼と一緒に2人で、金門島に行ってきました。
118	105	*	NNSBM03	そうですか[↓]。

*かぎ括弧で囲まれているのは「形式調整行動」で、二重かぎ括弧で囲まれているのは「内容調整行動」である。

これらの連鎖は、内容交渉を行う最中に、何らかの問題で形式的な意味交渉が発生し、それを達成した後にまた内容交渉に戻るという特徴がある。この特徴から、「形式調整行動」が「内容調整行動」の連鎖に内包されている傾向があることが明らかになった。よって、インターアクション全体は形式面の意味交渉と内容面の意味交渉によって構成されるものであり、従来の接触場面研究では、分析の視点が形式面の意味交渉に偏り、内容面の意味交渉の視点が欠けていることが指摘できるであろう。

6 おわりに：まとめと今後の課題

従来、NNS側のコミュニケーション・ストラテジーとNS側のフォリナー・

トークについての研究のほとんどは、接触場面でのコミュニケーション問題はNNSの伝達能力不足に起因していると考えられていた。NSとNNSのコミュニケーションとNS同士のコミュニケーションは性質的に異なるものであるため、NSとNNSの接触場面における意味交渉問題を考察するためには、両者のインターアクションの中でどのような調整行動が行われているかに重点を置くべきである。本研究ではNSとNNSの調整行動を異なるものとして扱わず、話し手と聞き手、すなわち共同作業という視点から考察した。なお、実際調整を行った「調整実行型調整行動」だけではなく、NSとNNSによる、「調整実行型調整行動」の引き金となる「調整要請型調整行動」も併せて考察することによって、より広い範囲で調整行動を捉えることができた。

また、宮崎(1998)が指摘しているように、調整行動には一回だけの「単純調整」、連続した「複合調整」が存在する。本研究では、複数回にわたって調整が行われている調整行動に対する類型化やより緻密な質的分析はできなかった。複合調整がどのような形で交わされているのかという点は今後の課題にしたい。また、今回の会話データは、日本語学習者のレベルを上級にしぼった。今後は学習者のレベルの違いによる調整行動の相違点についても考察してみたい。

〈淡江大学〉

【付記】

本論文は、2013年第6回日本語教育学会研究集会(日時:2013.8.31、会場:京都外国語大学)において口頭発表した内容を加筆、訂正したものである。的確なアドバイス、ご意見を賜った審査委員に御礼申し上げます。

注

- [注1] …… ファン(1999)では、会話参加における言語ホストの参加調整は会話維持を目的としているものであるのに対して、言語ゲストの参加調整は会話においてその場をしのぐというサバイバル的な目的を持つものであるとしている。
- [注2] …… 本研究ではある結論に達するための会話ではなく、雑談に近い会話を対象としている。
- [注3] …… ここでいう研究目的は、データ収集当時の研究目的であり、本論文の研究目

的ではない。

[注4] …… 話者の記号について説明する。「NS」は日本語母語話者で、「NNS」は日本語学習者を指す。その次の「B」はベースとなる話者で「S」は年齢が同等である話者で、「O」は年上の話者を意味する。「F」(女性)か「M」(男性)かで話者の性別を表す。最後の二桁の番号は各話者を区別するための通し番号である。

参考文献

- 池田玲子 (1999) 「ピア・レスポンスが可能にすること：中級学習者の場合」『世界の日本語教育』9, pp.29-43. 国際交流基金日本語国際センター
- 宇佐美まゆみ監修 (2011) 『BTSJによる日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011年版』東京外国語大学宇佐美まゆみ研究室
- 施信余 (2011) 「接触場面におけるコミュニケーション調整行動について—日本語母語話者と日本語学習者による話し合いの談話資料より」『淡江日本論叢』24, pp.75-96.
- 鄭惠允 (1997) 「「接触場面」における日本語の曖昧性に関する考察—日本語教育への「接触場面」概念の導入へ向けて」『人文科教育研究』pp.53-63. 人文科教育学会
- 西口光一 (1999) 「状況的学習論から見た日本語教育」『大阪大学留学センター研究論集 多文化社会と留学生の交流』3, pp.1-15. 大阪大学留学生センター
- ネウストブニー, J.V. (1997) 「プロセスとしての習得研究」『阪大日本語研究』9, pp.1-15. 大阪大学文学部
- 春口淳一 (2002) 『第三者言語接触場面における上級学習者の会話参加—言語ホストとしての参加調整ストラテジーに関する一考察』早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文
- ファン, サウケン (1999) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語学』2(1), pp.37-48. 社会言語科学会
- ファン, サウケン (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所 (編) 『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』pp.120-141. アルク
- 宮崎里司 (1998) 「第二言語習得理論における調整、意味交渉及びインプット」『紀要』11, pp.177-190. 早稲田大学日本語研究教育センター
- 宮崎里司 (2002) 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」『早稲田大学日本語教育研究』創刊号, pp.71-89. 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて」『世界の日本語教育』7, pp.137-155. 国際交流基金日本語国際センター
- Pica, T., Holiday, L., Lewis, N., & Morgenthaler, L. (1989) Comprehensible Output as an Outcome of Linguistic Demands on the Learner. *Studies in Second Language Acquisition*, 11, pp.63-90.